

〔編集後記〕

「札幌医学雑誌」の編集後記を委員歴が長い編集委員の中で年長者に依頼するのがよいとのことで現在の編集主幹の三高俊広教授から依頼された。私が札幌医科大学に京都大学から教授として赴任したのは平成18年10月である。いつから編集委員を務めているか憶えていないが、「札幌医学雑誌」に対しては変な雑誌だなという印象を持ち続けていた。本誌に学位論文として提出し、医学博士を取得しながら、同じあるいはほぼ同じ内容の論文をインパクトファクターのある英文雑誌に投稿するという、どう考えても二重投稿としか思えないようなことが普通に行われていることに疑問を持ち、一度教授会でもこれで良いのかと質問したことがあった。現在、大学基準協会による審査においては、大学院の学位取得過程が重視されている。本学の医学博士号取得は査読付き論文受理が条件となっており、本誌への掲載証明をもとにした学位審査請求は、今回は最後となるように改善された。本誌の役割も今後、変更していかねばならないと思う。

研究費と時間を使い発見した成果を世に問うにはイ

ンパクトファクターのある英文雑誌に投稿することが大切である。残念ながら「札幌医学雑誌」に投稿して受理されてもその研究内容は世の中では評価されない状況が今後急激に変わるとは思えない。その中で、三高編集主幹が改革を目指して企画された退職間近の教授の研究紹介は、教授自身の研究に対する姿勢や変遷を知ることができ、若い研究者には大いに参考になると思う。本号では、小児科学講座の堤教授と地域医療総合講座の山本教授が札幌医学雑誌でしか読めない総説を書かれている。ご多忙のところ執筆していただき、編集委員を代表して感謝申しあげる。また、各講座から推薦された「研究論文紹介」もこれから大学院に入り研究しようと考えている若者には大いに参考になるであろう。

札幌医学雑誌の存在価値を高めるにはどうしたら良いかについて真摯に考える時期になったと思う。編集委員だけではなく、皆が知恵を出して改革していかねばならない課題であり、今後の札幌医学雑誌の発展を期待する次第である。

(編集委員 下濱 俊)